

基調講演 2◎

いざなぎ流研究史概観

パネラーたちの研究史を中心に

山本ひろ子 所員／表現学部教授

いざなぎ流研究は現在に至るまでとても豊かな流れをつくってきていますが、時間がないので主に今日のパネラーの方々の仕事の概略を紹介し、このあとのディスカッションの一助にしたいと思います。

——いざなぎ流研究の本格化

先学による研究前史は割愛させていただくとして、まず筆頭にあげるべきは、なんといっても、いざなぎ流の名を世に知らしめた小松和彦さんの『憑霊信仰論』（伝統と現代社、1982年）でしょう。その頃の私は、いざなぎ流や呪術はもちろん、日本の民間信仰にほとんど関心がなかったのですが、なぜかこの本は買っているんですね。そのくらい当時の知的状況のなかで、インパクトのある本だったかと。これを読んでいざなぎ流の世界に足を踏み入れたという若い研究者は、何人いるのではないのでしょうか。斎藤英喜さんも、自分もその一人だったと、著書の中で述べています。

1970年代後半から80年代にかけては、高知の研究者高木啓夫さんの一連の仕事は外せません。綿密な調査を続けて祭文や詞章の収集をされた。その成果が『いざなぎ流御祈禱』の三冊本（物部村教育委員会、1979年、1980年、1986年）です。そして1996年には『いざなぎ流御祈禱の研究』（高知県文化財団、1996年）という大著を出されました。高木さんの研究調査は先駆的ですが、テキスト自体のクリティークはあまりされていないので、その辺りが私たちにとっては課題となりました。

——「いざなぎ流の宇宙展」をめぐる

今日のシンポジウムに直接つながりますし、研究上でも催事においても特筆すべきは、1997年に高知県立歴史民俗資料館で開催された「いざなぎ流の宇宙展」

です。当時の館長さんは、いざなぎ流研究のさきがけの一人吉村淑甫さん。梅野さんが中心で進めたこの企画展は、いざなぎ流の面、御幣や祭具、テキストなどが一堂に会した、画期的な内容でした。この企画展によって、いざなぎ流は世の中に初めてその姿を現わしたといえます。図録『いざなぎ流の宇宙——神と人のものがたり』も大変な労作で、いざなぎ流のこの上ない入門書の役割を果たしました。また梅野さんと斎藤さんの共編『いざなぎ流祭文帳』（高知県立歴史民俗資料館、1997年）の刊行も、読めるかたちのテキスト集として意義の大きいものでした。

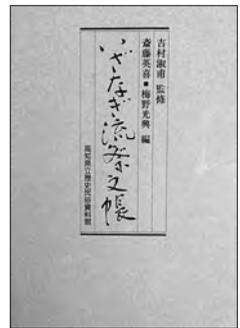
「いざなぎ流の宇宙展」開催中の11月30日、講演とシンポジウムが開かれました。午前中の講演は、高木啓夫さんの「いざなぎ流御祈禱資料の展開とその世界」、午後がシンポジウムで、タイトルは「いざなぎ流の生成とコスモロジー」。ちなみにパネラーは、今日の四人と同じメンバーでした（違うのは、当時のシンポジウムの司会は梅野さん。今回は、私と役回りが代わっているだけ）。面白い暗合かなあと。

そのときの報告タイトルは、小松和彦さんが「祭文から見たいざなぎ流」、斎藤英喜さんは「いざなぎ流の神体系と太夫」、私は「神楽から見たいざなぎ流」でした。梅野さんは、司会という立場で三人の問題提起をまとめ、自身の見解を述べられた記憶があります。今から考えると、このシンポが一つの結節点、またそれぞれの研究の分岐点・転回点となったのではないのでしょうか。15年目に同じ顔ぶれがふたたび結集したわけで、いったいどんな議論になるのかわかりませんが、不思議な縁のような気がします。

——近年の研究

斎藤さんの研究方法

さて「いざなぎ流の宇宙展」以降の研究史は、近年の成果になります。斎藤さんは2002年に、いざなぎ流に関する本格的な著作『いざなぎ流——祭文と儀礼』（法蔵館、2002）を刊行しました。先ほど小松さんのお話にも出ていましたが、斎藤さんは「なかおけさきよ」という太夫に弟子入りして、そのわざや祭文・法文を習得しながらいざなぎ流というものを掴んでいった。今までそう



いう研究の仕方があったかどうか分かりませんが、私たちにとって驚きでした。威力のある呪詛系の祭文を分析しながら、ある段階で、「これ以上は書けない」「自分の師匠の太夫さんとの約束だから」と筆を留めてしまう。「ほかの研究者が何か言うかもしれないけれども、自分はこういうスタンスだ」と明言したわけですね。これ以上は書かない、書いてはならない。そう自他に表明した。

そんなこともあって私たちは、師匠の太夫から「許し」を得て斎藤さんはいざなぎ流太夫になるんじゃないかと思ってたほどです。けれども太夫さんが病気になって、「許し」は得られなかった。

『祭文と儀礼』は、研究と実践とのせめぎあいを通して出された本といえるかもしれません。あとがきでは、師匠の太夫さんが亡くなったので、自分のいざなぎ流研究は、ある意味でここで終わったとも告白しています。斎藤さんの本の刊行から十年後の昨年、小松さんが、いざなぎ流の大著を出された。今日あらためていざなぎ流論議の場に連れ戻されたかたちの斎藤さんが、小松さんの研究成果を前にいったい何を語るのかということにも、大いに関心があるところです。

小松和彦さんの研究

いざなぎ流研究の第一人者としてずっと走り続け、雑誌に数多くの論考を書いてこられた小松さんですが、まとまった著作はなかったので、『いざなぎ流の研究——歴史のなかのいざなぎ流太夫』（角川学芸出版、2011）は、待ち焦がれていた刊行でした。副題に「歴史のなかのいざなぎ流太夫」とあるように、「歴史」からのまなざしによって、いざなぎ流の諸相が、見事な明晰さと緻密さで照らし出されています。



具体的には、中世の大忍荘の荘園時代に遡りながら、克明に歴史資料を読み込み、その作業の中からいざなぎ流の誕生や太夫の活動、また特色を掴み取っていく。いざなぎ流は、呪いとか陰陽道といった側面が強調されがちですが、「歴史」に徹底してこだわり、いざなぎ流の誕生と形成のプロセスを克明に描き出されている。大部の本なのに面白くて、私は久しぶりに分厚い研究書を読み通してしまいました。小松さんがこの本を書き終えた後、さらに何を目指そうとされているのか、ぜひ伺ってみたいです。

梅野光興さんの研究

歴史民俗資料館の梅野さん最大の業績は、「いざなぎ流の宇宙展」の開催と図録の刊行で、梅野さんでなければなしえなかった力仕事です。このために何年もかけて、物部だけでなく、周辺の地域を回って調査しながら、散逸している仮面や祭具、写本を集めたり、聞き取りを重ねたり……。斎藤さんは、梅野さんのこ

とを「天性のフィールドワーカー」と定義していますが、本当にその通りですね。そうした地道な調査の一方、梅野さんは、いざなぎ流の中での巫女信仰の要素に注目し、研究してきているので、今日もそういったお話が聞けると思います。

——和光大学といざなぎ流の関わり

では、山本ひろ子の研究はどうかと申しますと、斎藤さんが本の中でいみじくも指摘されているように、長いこと中断しており、いざなぎ流についての勉強もろくにできていません。ただまったく離れてしまったわけではないんです。フィールドワークやイベント絡みで、いざなぎ流とのつながりが保たれてきています（資料B、また『資料集・いざなぎ流研究の現在と物部フィールドワークの12年』をお持ちの方は、「年表からみる物部和光ノ不思議な関係」の箇所を開いてみてください）。

その一つが、1999年のINAXギャラリー『土佐・物部村 神々のかたち展』で、いざなぎ流について講演を頼まれ、いざなぎ流の言語感覚といったテーマで話した憶えがあります。

いざなぎ流「御崎の祭り」東京公演

その次は、2003年の第19回〈東京の夏〉音楽祭でしょうか。アリオン音楽財団が毎年夏に開いている音楽祭で、2003年は「儀式・自然・音楽」がテーマ。和光大学卒業生のプロデューサーといざなぎ流の祭儀を持って来られないだろうか、と相談しました。とはいえ簡単なことではありません。舞神楽こそ外で披露することはあっても、祭儀を公演したことはほとんどなかった。いざなぎ流の祭儀は、原則として家の祭り・宅神祭ですから。そこで中山義弘太夫さんに持ち掛けたわけです。中山太夫は斎藤さんの師匠・中尾計佐清さんの一番弟子に当たる方で、和光大学の物部フィールドワークでも、御幣切りの実習でお世話になるなど親交がありました。中山さんは私共の趣旨を理解し、外でいざなぎ流の祭儀をしてよいかどうか、神様にお伺いを立ててくださった。「許し」が下り、7月13日に赤坂・草月ホールで「物部村のいざなぎ流祭儀～御崎の祭り」の公演が実現しました。私の監修解説で、始まる前と休憩時には御幣切りのワークショップも開いたり、物部フィールドワーク体験学生も手伝ってけっこう盛況でした。

幻となった和光大学日月祭

いざなぎ流太夫が東京に来ることはめったにないことですから、この機会を利用し、公演の翌日（7月14日）、和光大学に中山太夫たちを招いて、ワークショップと集う会を開きました。実はもうひとつ目的があったのです。それまで私は、花祭り、大元神楽、荒神神楽などの神楽を和光に招致し、本場に負けないほどの

公演を実現してきました。一方、物部フィールドワークでいざなぎ流神楽保存会とは親しく交流してきている。そんな結びつきから、和光でいざなぎ流の祭儀を実施できないだろうかと思いついたのです。それもいざなぎ流最大の祭り「日月祭」を、キャンパスの庭で開催するという大それた着想でした。

大学の方からはOKがもらえそうだったので、中山太夫におそろおそろお願いしてみたところ、太夫さんは「やりましょう」。中山太夫の祈りを通して神さまの「許し」が出たと聞いたときは嬉しかったですね。そこで7月14日の来校のときに、中山太夫に祭場候補の下見をしてもらったわけです。私が選んだ場所は、和光坂を登った階段の上の広場。大きな木もあるので、それを背景に日月祭の象徴といえる三階棚を作ろう、など次々と構想はふくらみました。ところがその年に、太夫さんの奥さんが亡くなられ、開催は見送りとなりました。また中山さんも2007（平成19）年に他界され、和光大学いざなぎ流日月祭は幻とついで去ったわけです。

このように物部フィールドワークだけではなく、和光大学といざなぎ流とはなにかとご縁があるので、私の方もそうした機会にいざなぎ流のことを考えつつ、今に至っているということです。

以上、パネラーの研究と仕事を中心に、研究史の一端を駆け足で辿りました。それを踏まえて、パネルディスカッションのほうに入っていきたいと思います。

[やまもと ひろこ]